

研究課題	I C Tを活用した児童の感情ケアや校務のスリム化により高める学校全体の教育力
副題	～FEELBOT・コグトレ・電子書籍の導入がもたらす教師力の向上～
キーワード	ターゲット児童 感情の見える化
学校/団体名	公立鳴門市立黒崎小学校
所在地	〒772-0001 徳島県鳴門市撫養町黒崎字宮津 88-1
ホームページ	https://school.e-tokushima.or.jp/es_kurosaki/

1. 研究の背景

創立150周年を迎えた黒崎小学校は児童数100名ほどの小規模校である。隣接幼稚園は2022年に閉園し、児童数が減少する一方で、特別な支援を要する児童は年々増加し、昨年度の特別支援学級在籍児童と不登校傾向が見られる児童の合計は約3割に達した。教職員は、児童や保護者の願いに応えようと努力を重ねたものの、指導に行き詰まり心身の疲労が蓄積していた。教職員定数が不足する状況も重なり、教職員の疲弊は深刻化していた。

また、若手教職員の増加も顕著で、教職経験が浅い教職員が多くなり、現在の3・4・5年生担任は初めて通常学級担任を受け持っている。こうした職員構成の影響もあり、昨年度の調査（図1「現在の悩み」）によると「子どもが何を考えているのかわからない」と答えた教員の割合は25%と、調査対象校全体の平均値より約2割も高かった。

多様な価値観をもった保護者や感情のコントロールが苦手な児童が増えているなか、教職員が一人一人の力量を高めることはもちろんのこと、若手教職員が増えている現状では学校全体で組織的に教育力を高めていくことが求められている。

このような状況のもと、校務のスリム化は急務である。ICT化により業務を効率化し、教職員の負担を減らすことが教育力の向上につながっていくものと考えられる。

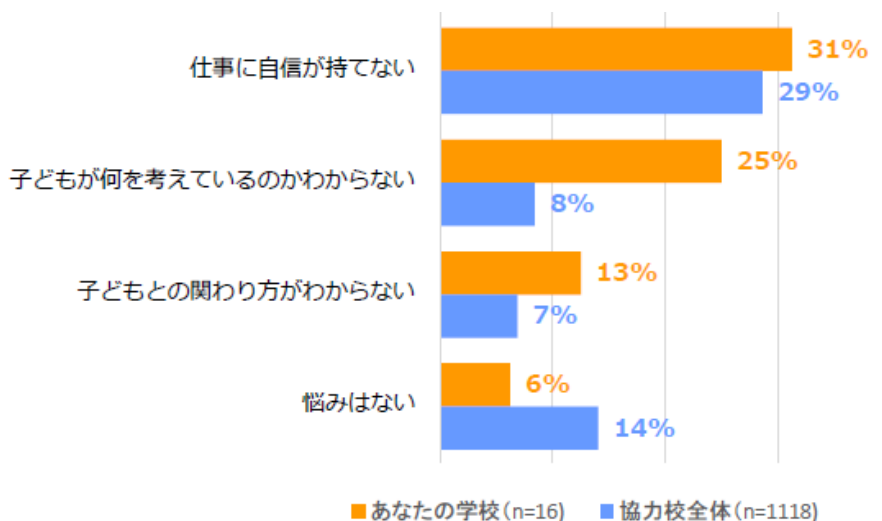


図1 令和5年度文部科学省「新任校長ハイブリッド研修事業」学校意識調査（サーベイ）設問 「現在の悩み」より

2. 研究の目的

ICT化を進め、より組織的・意図的な児童の感情ケアや発達支援に取り組み、全ての児童を対象に自発的・主体的に自らを発達させる過程を支え、学校全体の教育力を高める。

研究の背景と本校における発達支持的生徒指導が十分に機能していなかった現状を踏まえ、研究の目的を上のように集約した。

研究初期は、これまで教師が担ってきた業務をICT化することで省力化・効率化を進め、児童理解に注力することが学校全体の教育力を高めると考え、「校務のスリム化」も大きな目的の一つであった。このため様々なICTを導入し、その効果検証も考えていた。副題に挙げている「コグトレ」や「電子書籍」はその代表的なものである。

しかし、児童の認知機能を高めるコグトレや読書を活性化させる電子書籍は、あくまで児童の学習スキルアップをめざしたツールであって、教師の資質を直接高めるとは必ずしも言い切れない。そこで、学校全体の教育力を高める研究としては、「FEELBOT」が最適であると考え、組織的に児童の発達を支援することに主眼をおいた。

このため、本研究においては、研究課題に掲げている「校務のスリム化」は研究目的から除外し、FEELBOTに特化した研究に7月から変更した。

FEELBOTの概要は次の通りである。

FEELBOT（図2・図3）は、次の3つの項目を児童がタブレットに入力する。



図2 FEELBOT 入力画面



図3 FEELBOT を入力する児童

- ① 心の表情・・・笑顔、憂鬱、幸せ、悲しみ等の9種類の絵文字から選択する。
- ② 心の色・・・赤、青、黄、黒等の8色から選択する。
- ③ 幸せ点数・・・10点満点で数値化する。

児童は午前と午後に3つのデータを入力し、一日の感情の変化が「見える化」される。さらに、一日の振り返りとして、その日に感謝や称賛したい友達を決めて「☆」を最大3人まで送る。教職員はこれらのデータをリアルタイムで共有できる。児童がどんな感情で、登校しているのか。そして、どんな感情で下校したのか。どんな人間関係であったかが一目瞭然となる。担任だけでなく、管理職を含めた複数の教職員と情報を共有することで、学校全体で児童理解を深めサポートする体制を整えることができる。

3. 研究の経過

FEELBOT が校内サーバーに設置できたのは5月初旬であり、各学年が運用を開始し、最終的に1年生までの全校児童が入力できるようになったのは5月29日であった。

初期には学校全体での FEELBOT の利用目的や効果の検証が不十分で、運用方法の見直しを夏休みに行った。9月以降はグループ及びリーダーによる定期ミーティングを重ね、11月中旬の中間見直し等、協議と共通理解を積み上げながら大きく4期に分けて研究に取り組んだ。

【Ⅰ期5月29日～】全校で FEELBOT 運用の開始

【Ⅱ期8月25日～】ペア学年による「幸せ点数」を高める取組

【Ⅲ期9月25日～】ターゲット児童に「☆（感謝や称賛）」が送られる取組

【Ⅳ期11月21日～】ターゲット児童をローテーションする取組

4. 代表的な実践

(1) 【Ⅰ期】全校で FEELBOT 運用の開始

FEELBOT の環境が整った5月29日から夏休みまでは次のように運用した。

1. 児童登校後	児童が「幸せ点数」「心の表情」「心の色」を入力
2. 担任・教頭・養護教諭が確認	教頭・養護教諭が「気になる児童」を抽出
3. 各教職員で共有	教員端末に「気になる児童」をアップ
4. 各教職員が声かけの実践	教員が「気になる児童」へ重点的に声かけ
5. 児童下校前	児童が「幸せ点数」「心の表情」「心の色」 「☆（感謝や称賛）を送りたい友達」を入力
6. 担任がデータを確認	担任や学年団で分析

担任は、午後のデータを見て家庭連絡することもあり、保護者と連携して児童の不安を払拭することに役立てた。教師が気づけないところでのトラブルや外見に表出していない不安を見取ることができ、担任業務の補助として機能し、教師力の向上につながったと言える。

しかし、FEELBOT データをどのように見取り、どのような手立てを施すのか。全職員で「気になる児童」を共有しても最終的には担任に頼るしかなかった。これでは学校全体の教育力を高めたと言えるのか疑問が残った。そこで FEELBOT 運用を夏休みに見直した。

(2) 【Ⅱ期】ペア学年による「幸せ点数」を高める取組

夏休みが明けて間もなく運動会練習時期となる。全校や学年をまたいで合同で練習する機会も多くなる。そこで、まずペア学年をつくり組織的に取り組むことにした。「気になる児童」を共有してチームで声かけをしていく。次に学級全体の幸せ点数を指標とし、どのような取組が児童の感情ケアに有効かを研究することにした。午前と午後の幸せ点数を比較し点数を高めるために何が有効かを探った。本校は単学級であり6年間、学級内のメンバーがほぼ変化しない。そのため、ペア学年で交流させる方が、児童の心の安定につながりやすいと考えた。学級内の人間関係に息苦しさを感じている児童には、他学年との交流が有効であった例も見られた。運動会練習の達成感・成就感から、幸せ点数を高めている学級もあった。

夏休み明け1週目				運動会の練習開始1週目				運動会の練習開始2週目			
日付	午前	午後	増減	日付	午前	午後	増減	日付	午前	午後	増減
8月27日	9.07	9.41	0.34	9月2日	8.84	8.76	-0.08	9月9日	9.06	9.33	0.27
8月28日	9.21	8.27	-0.94	9月3日	9.66	8.07	-1.59	9月10日	9.22	9.60	0.38
8月29日	7.50	7.53	0.03	9月4日	9.53	8.14	-1.39	9月11日	9.07	9.00	-0.07
※				9月5日	9.15	8.41	-0.74	9月12日	9.46	9.47	0.01
	は減少した日			9月6日	9.35	9.26	-0.09	9月13日	9.33	7.93	-1.40

図4 1年生の「幸せ点数」の学級平均値

しかし、現実には幸せ点数はその日の行事や疲労が大きく影響していた。「図4 1年生の『幸せ点数』の学級平均値」が示す通り、運動会練習が本格化すると午後の幸せ点数が下降している。この傾向は他の学年にも見られた。さらには、FEELBOT 入力時間が確保できない等、ペア学年が足並みを揃えて見取っていくことも十分に機能しなかった。

(3) 【Ⅲ期】ターゲット児童に「☆（感謝や称賛）」が送られる取組

これまでの幸せ点数にフォーカスした取組は学校行事等に左右されることがわかった。また FEELBOT の入力状況により効果の検証が阻害されてしまう。FEELBOT を活かして、児童の感情ケアに結び付く組織的・意図的な取組が求められた。

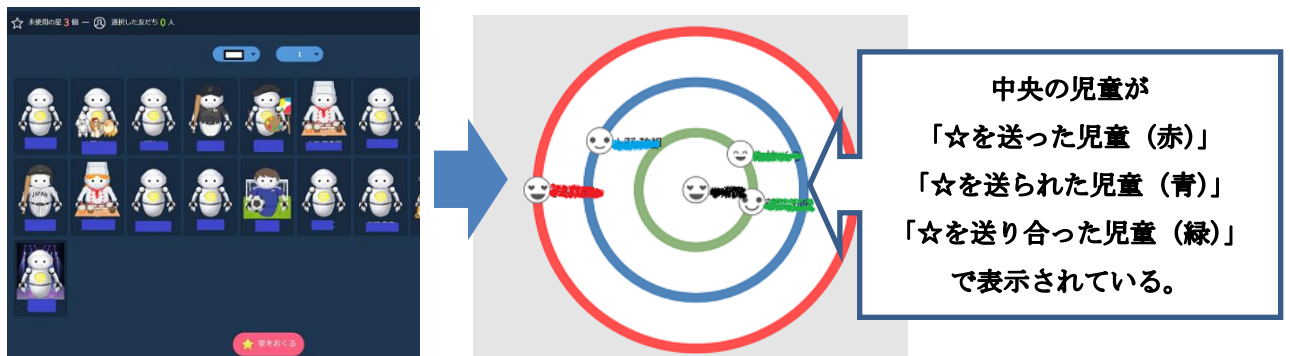


図5 ☆を送る児童の選択画面（左）と教員の確認画面（右）

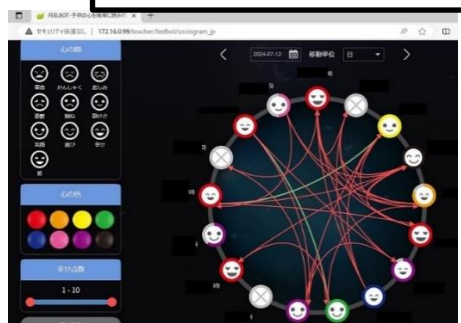


図6 放課後のソシオグラム

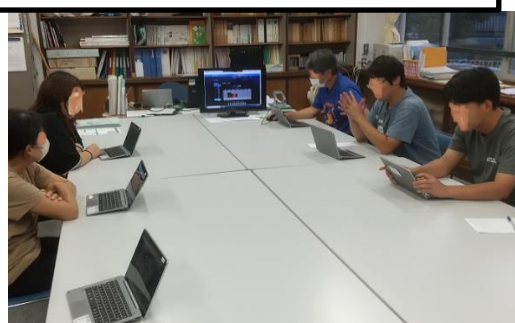


図7 定期ミーティングの様子

運動会を区切りとして見直した結果、図5の「☆」を送る機能を活用することとした。図6の通り、教職員にはソシオグラムで友達関係が「見える化」され、孤立傾向にある児童が把握

できる。この児童に☆が送られるようになれば、学級集団としての成長あるいは担任の教師力の向上であると考えた。☆が送られていない児童を「ターゲット児童」とし、ペア学年で☆が送られるような活動や声かけをした。図7の「定期ミーティング」を実施しながら、有効な取組を共有することにした。

図8は1年生の、「ふわふわ言葉」を使えたらシールを貼っていくという取組である。これにはペア学年の6年生も参画した。6年生が積極的に1年生の声を拾ったり、ふわふわ言葉を使う場面を教えたりした。6年生のターゲット児童は、このような交流が1年生だけでなく同学年からも評価されるようになり、☆が送られるようになった。休み時間に楽しそうに1年生と交流している姿が増え、心の安定にもつながっていた。



図8 ペア学年での取組例

4年生のターゲット児童は教師の支援で、友達とのトラブルが減った。さらに、担任が積極的にターゲットのよさをアナウンスしたり、よさを引き出すために意図的に活躍の場を創出したりした。すると、周りの児童がターゲット児童の活躍に目を向けるようになり、☆が送られることが増えた。図9で示したのは、効果が見られた学級である。

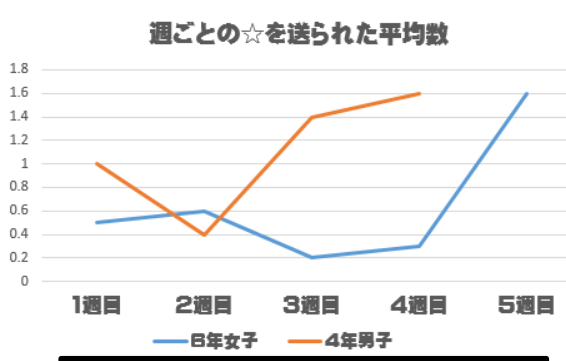


図9 4、6年生のターゲット児童

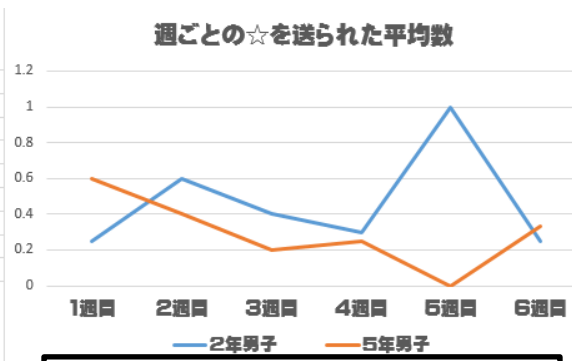


図10 2、5年生のターゲット児童

一方で、図10で示している2年生と5年生のターゲット児童には、☆が送られた平均数が1を超える週が一度もなかった。☆が送られるようになったとは言えず、両学級とも期間中、ターゲット児童を変更できないままになった。

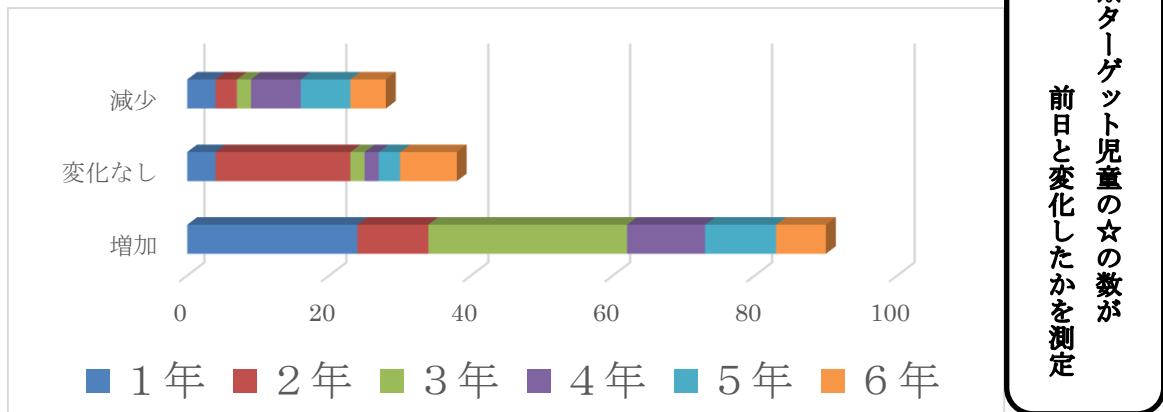
この要因としては、ターゲット児童の「よい行い」が常に感謝や称賛に結びつくわけではないことや、お手伝い等の活躍の場を提供したことが逆にトラブルを招いたこと等が挙げられ

た。また、担任の過度な支援がターゲット児童への負担につながる恐れも考えられた。

(4) 【IV期】ターゲット児童をローテーションする取組

「ターゲット児童に☆が送られるようにする」という基本方針は変えないで、より効果的な取組をめざして見直した結果、ターゲット児童を固定化せず、毎日変更するローテーション制（日直が輪番）を導入した。さらに次のような点を各学級で指導を徹底した。

- ① ☆を送る定義を指導（単なる仲の良さでないことを確認）
- ② ☆を送る理由を表出（「今日のキラキラさん」として文面化）
- ③ 全員がターゲット児童（日直）に重点的に着目
- ④ その日一日と学級の全員のことを十分に思い浮かべてから入力



※ターゲット児童の☆の数が前日と変化したかを測定

図11 ターゲット児童に☆が送られるようになったかを分類したグラフ

学級内に曖昧な理由で☆を送るのでなく、よく考えて☆を送る雰囲気をつくり、担任も作画的にならないように注意した。Ⅲ期でも行ったターゲットのよさをアナウンスしたり活躍の場を創出したりすることに努めた。ターゲット児童が過度に幸せ点数を上下動させていなかったことから、不自然に☆が送られているとは考えにくい。

図11はターゲットになった児童の☆が前日と変化したかを表している。全学年でターゲット児童に☆が送られるようになり、固定化する傾向があった☆の送り先相手に変化が見られるようになった。学級内での「よい行い」に着目できる児童が増えたと言える。

有効であったと報告された担任の声には次のようなものがあった。

- ・日直に注目させ、頑張っていた様子を帰りの会で発表させた。
- ・お手伝いや友達を助ける姿が見られたときに、必ず褒めるようにした。それを聞いて、褒められた子に☆を送っている子もいた。
- ・活躍できるよう、すべきことを素早くやり終え、他のこと（いいこと等）ができるようにサポートした。
- ・一日の中で、キラッと輝いた友だちを見つけて紙に記入し、その中から☆を送る子を決めた。すると日直（ターゲット）の行いに自然と目が向いた。
- ・帰りの会で☆を送った理由を発表することで、次回への意欲が高まった。

ただし、図11をよく見ると、高学年になるほどターゲット児童に☆が送られる割合も下がっている。「効果が薄れている」「作画的になりつつある」と感じた各担任は、冬休み明けから

は、ターゲット児童（日直）への注目度を意識的に下げた。このため、ターゲット児童（日直）への☆が減る学級も出てきた。4年生以上は冬休み前までの4週間のデータである。

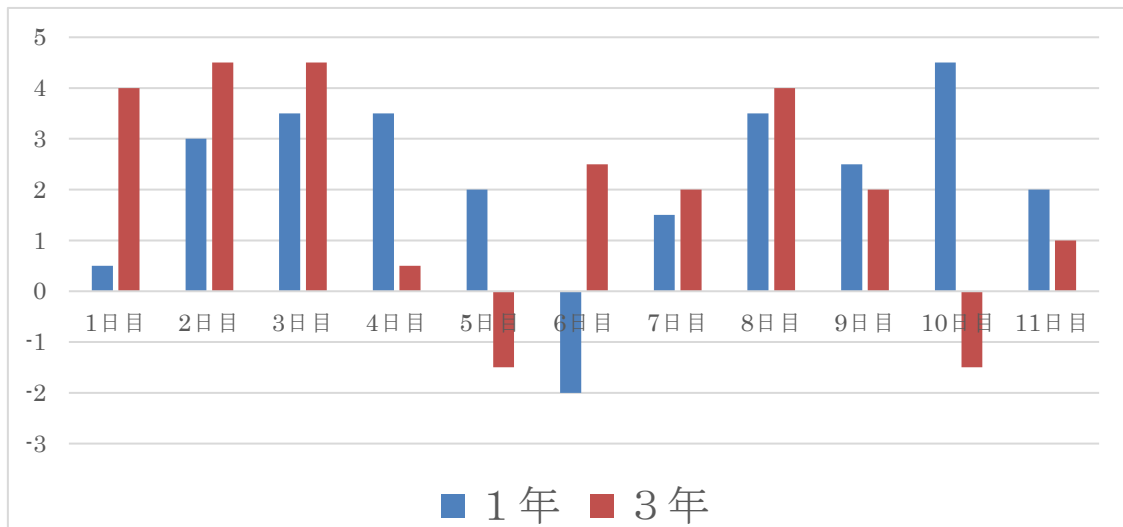


図 1 2 1、3年生のターゲット児童の前日と比較した☆の獲得増減数 ※2名の平均

図 1 2 は、1、3年生の冬休み明け後からのターゲット児童の☆の増減数である。両担任ともに「日直さんをよく見よう」といった声かけを減らす、あるいは止めているが、変わらず☆が送られたことを示している。感謝や称賛すべき児童を見つける姿勢が育っている。

5. 研究の成果

学校全体の教育力や教師力の向上をめざして取り組んだ成果が3点挙げられる。

(1) 称賛すべき行いを学級内で共有し、温かい人間関係を育んだ。

児童には自分が☆をもらえていることやもらった理由はわからない。FEELBOT の入力データは公開されないことが大前提であるため、「☆が送られた」という表現を避けて教師が他の児童からの感謝や称賛を代弁するしかない。FEELBOT を導入したことで、教師はそうした場面を学級内で創出しようという努力を積み重ねた。称賛された児童のうれしそうな様子を見て学級経営に自信を持てるようになった担任もある。結果として、学級内に温かい雰囲気広がりが、児童や教師との良好な人間関係を構築できた。

(2) 児童への共感がしやすくなり、児童理解が進んだ。

2月末の調査で「FEELBOT の導入により、児童理解が進んだ。」と全教職員が回答した。

その要因には「教師の働きかけがどのように作用したのかがわかった。」「ペア学年での取組や定期ミーティング等で自分の学級を複数の目で見ることができた。」等が挙げられていた。担任業務は「個」業になりがちであるが、FEELBOT は全教職員で学級や児童個人の様子を見取れるので、担任の心理的負担軽減につながっている。

(3) 声かけのタイミングやその配分がしやすくなり不登校児童が減少した。

一人の教師が児童の感情を見取り、適切に声かけをしていくには、限界がある。FEELBOT がその不足を補っている。一例を挙げると、FEELBOT 上に不安な心情が読み取れる児童が

あった。学校生活上では変化がなかったことで、担任が家庭連絡をすると、学校外の人間関係で悩みを抱えていることがわかった。保護者は学校外のことなので、相談をためらっていた。関係機関と連携し、解決に至った。不安や悩みを抱えやすい児童であったため、不登校の未然防止につながったと言える。

このように FEELBOT には、教師の働きかけの不足を補う効果があり、本年度の不登校傾向児童は前年比で約 6.6% 減少していることから、FEELBOT が不登校の解消に大きな役割を果たしたと考えられる。

6. 今後の課題・展望

セキュリティの問題もあり、FEELBOT データは児童の感情を「教師が見える」だけにとどめている。個人情報特定されない形で学級全体の様子を「見える化」できれば、所属意識を高めたり、集団生活を反省したりすることに活かすことも可能である。

また、より有効な手立てとして、次の 2 点も考えられる。

- ① 保護者との情報共有や自宅での入力を可能にする。
- ② 朝の時点までは、児童の感情データを公開する。

自宅で保護者と一緒に入力することができれば、より自分の生活をじっくり振り返り、自己認識を深めたり、不登校の兆候を早期に発見できたりするメリットも考えられる。

さらに、登校時の感情であれば、学級全体（他の児童）に共有しても問題はないのではないだろうか。教師だけでなく児童一人一人が、友達の感情を知った上で生活するというのも、よりよい人間関係構築につながる可能性が高い。

いずれにしても、今回の取組ではタブレットの不備が運用の足かせになることが多くあり、セキュリティや動作面の性能を含めて今後の技術進歩を待ちたい。

7. おわりに

FEELBOT を導入したことで教職員の児童理解が進んだだけでなく、学年の枠を超えて児童をサポートしようとする意識を高めることができた。今後も、全教職員で効果的に活用できるようにシステムの構築を進めたい。

最後に、本研究の遂行に関わって助成をいただいたパナソニック教育財団、ご助言・サポートをいただいたオンラインサポートチームの皆様、FEELBOT 導入にご尽力いただいた（株）NEC 内田成俊様、鳴門市教育委員会沖宗優指導主事様にこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。

8. 参考文献

- ・2019年度パナソニック教育財団実践研究報告書「児童の学校生活満足度を高め、適切な自己認識・人間関係を構築する心を育てる教育プログラム～児童の状態・感情変化を見える化、感情データの生徒指導・学級経営・学校経営への活用～」徳島県上板町高志小学校
- ・文部科学省基礎研究（C）（一般）、課題番号21K02586「情動把握アプリを用いた小学生の情動に関するケーススタディ」研究代表者八並光俊